

# アイヌ語の可能性

関根 健 司

## ◇ 注目される二風谷小学校の取り組み

平取町立二風谷小学校では、総合学習の時間を  
用いたアイヌ語授業が昨年、平成二七年度は七月  
より五時限、五回開催されました。そして今年、  
平成二八年度は倍の十時限、十回のアイヌ語授業  
が計画され、すでに第一回は四月二七日に開催  
されました。この授業で私は講師を勤めています。  
アイヌ文化について学ぶ試みはこれまで「ハラ  
ラキ活動」という名で二風谷小学校でもありまし  
たし、他の小学校でも行われていたのですが、ア  
イヌ語に特化したものとしては、全道的にみて  
も、ということはもちろん全国的にも初の試みな  
ので、新聞、テレビにも取り上げていただき少し  
注目されています。

二風谷小学校でいち早くこのような取り組みが  
行われるようになった理由としては、この春に定  
年退職された前校長がアイヌ文化にとても感心を  
持つておられた、ということが一番にあげられま  
す。住民の半数以上がアイヌという地域の特徴も  
あります。私自身は長年、二風谷アイヌ語教室子

どもの部の指導者をしてきたのですが、仕事とし  
ては造林業に従事していました。それが昨年、町  
立アイヌ文化博物館に町の職員として中途採用さ  
れたのです。学校的にはアイヌ文化を取り入れた  
活動を増やそうとしていた矢先だったので、私へ  
の講師依頼をしやすい状況ができたといえます。

今回のアイヌ語学習は小学校からの要請、依頼  
に対し私、及び私が所属する博物館と町教育委員  
会が応えて実現したものです。私は業務の一環と  
して学校へ赴いています。普段よりアイヌ語の普  
及・復興を唱えている者としては願ってもない事  
態です。私の願いは二風谷小学校の活動を見て町  
内の他の学校、さらには全道各地の学校でも同じ  
ような取り組みを始めてくれることです。

画期的で大きな一歩であることには違いないの  
ですが、所詮、一年間でたったの十時間です。あ  
る程度の会話力習得など望むべくもありません。  
私が気をつけているのは、子どもたちに、いかに  
面白い、と思ってもらえるか、小学校を卒業した  
後もアイヌ語、アイヌ文化に興味を持ち続けても  
らえるか、ということです。ですから毎回ゲーム  
的な要素をふんだんに取り入れ、工夫をこらしな

がらやっつていこうと思っています。

一般的な疑問として「本当にアイヌ語なんて話  
している人がいるのか?」「いまさらアイヌ語を  
復活させて何になるんだ?」といったことがある  
でしょう。アイヌ語話者の数については答えよう  
がありません。アイヌ語をよく知っていても伝承  
者として活動されていない方もいます。聞いて分  
かっても話せないという方もいます。現在アイヌ  
語で日常会話をしている人はほとんどいないとい  
えます。

明治以降、急激な速度で圧倒的少数者に追いや  
られたアイヌ民族に対する差別は凄まじく、学校  
でアイヌ語を使えば罰せられ、親たちも「これか  
らは子どもにアイヌ語を教えるても何もないこと  
がない、和人にいじめられるだけだ」という思いの  
もと、家庭内で言語の伝承が行われない時代が長  
く続きました。まさにユネスコが認定する「最も  
絶滅の危機に瀕する言語」に当てはまります。し  
かし状況は少しずつ良くなってきています。自分  
のルーツに興味を持ち自分たちの言語を獲得しよ  
うとするアイヌの若者が実際、増えてきているの  
です。

## ◇ ニュージールランドのマオリ語復興に学 ぶ

私の活動の根底には、平成二三年に初めて訪れ、  
それ以来、往来が続いているニュージールランド(以  
下、NZ)マオリ族との交流があります。

マオリ語も一九七〇年代にはアイヌ語と同じく「絶滅するだろう」と言われていました。それが現在は見事に復活し国の公用語の一つとなっています（あとの二つは英語と手話）。NZには全ての授業をマオリ語だけで行う幼稚園から高校過程までの学校が約八十校もあります。マオリ語だけで放映するテレビ局があり、スーツを着たアナウンサーがマオリ語でニュースを読み上げています。「セサミストリート」のマオリ語版のような番組もあり、子どもたちも小さいころから自然とマオリ語に触れる環境があります。街中の全ての掲示板などもマオリ語、英語併記に移行しつつあります。マオリ語の需要は増え続ける一方で衰退の危惧はもう無いように見受けられます。世界で最も言語復興を成功した例がマオリ語だといわれています。

私が出会ったマオリたちは自分たちの言語を話し、自分たちの文化に関わっていることを誇りに思い、生き生きと暮らしていました。アイヌ民族もアイヌ語を復活、獲得することで、そのような状況になれるのではないかと思います。歴史的に同じような道のり、あるいはそれ以上の苦しみを味わわれてきたアイヌ民族が、圧倒的に少数であるため、自分たちの声が国政まで届きにくい、という理由でマオリが勝ち取ってきたのと同じ権利を主張しないのはおかしいと思いました（マオリはNZ総人口の一五%、それに対しアイヌは日本の総人口の〇・〇二%だといわれています）。

私が掲げている大きな目標は「北海道におけるアイヌ語の公用語化」です。これはマオリ語のNZでの公用語化にヒントを得ています。まったく実現にはほど遠い話ですが、もしアイヌ語がお付き合い願いたいのですが、もしアイヌ語が公用語化されれば公文書などのアイヌ語日本語併記をする翻訳家、役所でのアイヌ語担当者、アイヌ語教師、ラジオやテレビでのアイヌ語アナウンサー、アイヌ語新聞の記者など、少し考えただけでもたくさん職業が創出されます。現在のアイヌ語学習環境の問題として、いくら勉強してもそれが仕事には繋がらない、ということがありますが、これは公用語にすることで「アイヌ語の需要を創りだし、それを地域の特性にしよう」という考えです。

#### ◇ アイヌ文化の可能性

移民の国、というイメージがあるNZで現在「俺たちはニュージランダー」として誇れるものは何があるだろう」と思った時に「そうだ、ここにはマオリ文化があるじゃないか」ということで白人でもマオリの伝統舞踊ハカを踊る人がたくさんいます。マオリ語を学ぶ白人の若者も増えています。これにはマオリ語ができた方が就職に有利だ、といった状況も手伝っています。政府もマオリ文化を観光の大きな柱と捉えています。

このような状況を北海道においても、アイヌ文化を軸に創りだせませんか。多くの道民が

自分たちの誇りとしてアイヌ文化に取り組みアイヌ語を習得する。アイヌ文化が北海道の特色として、もっともっと注目され、アイヌ文化自体が多くの産業、職業を創出する。

もちろんアイヌ民族自身の権利回復を置き去りにしてこのようなことだけ進めるわけにはいきませんが、多くの道民にとってもアイヌ語、アイヌ文化を学ぶことは、自然との共生を長年実現してきた民族の知恵を学ぶこととなり、とても意義深いことだと思います。実際にはアイヌ語、アイヌ文化を教える教師や教材の不足などいろいろな問題も山積していますが、現在は偏見のない目でアイヌ文化の素晴らしさを学び、伝えやすい時代になりつつあるのだと感じています。

二風谷小学校アイヌ語授業は単純な図式で見るとならば同化、単一化、一辺倒であった教育現場が多様性の尊重に向けて進路変更を始めたターニングポイントだと捉えることもできます。アイヌ語が復活することは多様性を容認する社会の形成に繋がりが、それはアイヌ民族にとつていいことであり、ひいては北海道にとつて、日本の社会全体にとつてもいいことだと信じ、これからも、どんなアイヌ語を普及させるための活動を続けていきたいと思っています。

関根健司（せきね けんじ）

二〇一五年より、平取町立三風谷アイヌ文化博物館で学芸員補を務める。